

館蔵品展 はじめまして、かけじく です

板橋区立美術館(赤塚) 2021.06.05~07.04



「掛軸」とは、日本には仏教が伝来した頃に伝わったもので、書や絵を壁や床の間に飾って鑑賞できるように仕立てて、主に礼拝や儀礼に用いられ、鎌倉時代末頃には山水や人物、花鳥図など鑑賞を目的とした作品が定着した。

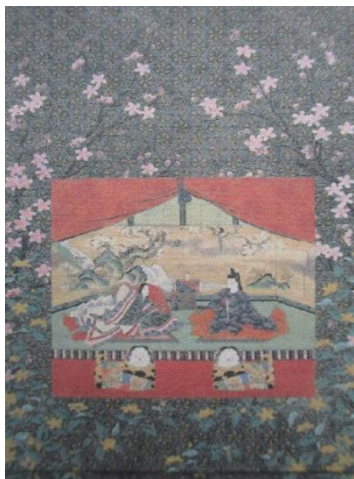
そして江戸時代になると、町人など幅広い階層の人々が「掛軸」を楽しむようになり、数多くの作品が次々と制作されるようになった。

本展は、江戸時代の作品を中心に、縦長・横長といった画面の形による表現の違いや、対(セット)で鑑賞する面白さ、作品とともに現代まで

伝わる箱や文書など、さまざまな角度から数多くの「掛軸」を紹介している。

「花鳥図」は、花の咲いた草木に鶏、松に鷹や鶴、さらに花に虫や「猫に牡丹」といった取り合わせも含まれるもので、山水画と同じく中国大陸において唐の時代から存在していた画題であるが、日本における「花鳥画」は単なる中国絵画の模倣ではなく、「大和絵」の手法も取り入れた「障壁画」として描かれている。

鈴木其一 《蝶二芍薬図》 上図 江戸時代



狩野章信 《内裏雛図》
1809(文化6)年



谷 文中 《梅下双鶏図》
江戸時代



沖 一峨 《花鳥図》
江戸時代

「谷文中」(1823~1876)は、幕末から明治にかけて活躍した画家で、この作品は掛軸の一幅対でありながら、構図的には一つに連続させて左幅から右幅に流れる画面構成をとる画伯の新しいアイデアが見られる。